地球と社会のための“人づくり”応援マガジン

ESDレポート vol.25

2011年初春　2011年1月17日発行

認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議

ESDとは「持続可能な開発のための教育=Education for Sustainable Development」の略。環境・貧困・人権・平和など、私たちが直面するさまざまな問題に取り組み、豊かで公正な未来を創造するための「価値観」と「スキル」を育む、未来創造型の学びです。「国連持続可能な開発のための教育の10年（ESDの10年）」が2005年からスタートし、世界各国で取り組まれています。

特集　学校と地域で取り組むESD

ESDを進める関係者から、学校の現場でESDの理解はまだまだ広がっていないという声が多く聞こえてきます。

一方で、この4月から小中学校で実施される新しい学習指導要領に「持続可能な社会の形成」に関する事項が明記され、また、文部科学省が学校のESD推進拠点として位置づけているユネスコスクール(※)は2007年の24校から2010年11月時点で230校を超え、さらに2014年までに500校を目指しています。ESD-Jの入会者や関連書籍の購入者も、この2～3年学校関係者がとても増えています。

このような現状を踏まえ、今号では、学校周辺にまつわるESDの動きを特集し、皆さんとともに、学校と地域で進めるESDについて考えていきたいと思います。

(※) ユネスコスクール：ユネスコの理想を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校、詳細は次ページにて

目次

特集　学校と地域で取り組むESD

学びの場をデザインする　「天城学習」で生徒の自尊感情を高める 2
ESDリレーコラム　全国学校給食協会、辻幸二郎さん、青年海外協力協会 4
ESD-Jの活動紹介　ユネスコパートナーシップ事業の取組み 5
つなぐ人の視線　地域と学校のつなぎ手の思いが地域を変える 6
数字でみる“社会”　6,795人 7
トピックス　学校におけるESDに関する研究の中間報告書が発行されました 8

Japan Council on the UN Decade of Education for Sustainable Development
ESD-J
「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議

本シリーズは、ESD につながる全国のさまざまな活動を、「教育」の視点で紹介していく事例レポートです。

伊豆半島の中央に位置し、豊かな自然に囲まれた天城中学校。ESD を意識して学習計画を見直し教員の意識改革を進めて 2 年目、少しずつ成果が出てきました。その取組みが評価され、全国のユネスコスクールを対象に審査された「第 1 回 ESD 大賞（主催：NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラム）」の中学校賞を受賞しました。しかし、ESD の取り組みには、教師たちの間でも戸惑いやさまざまな苦労があったといいます。今回の学びのデザインは、天城中学校が ESD の視点で見直した総合的な学習の時間を中心に、教師たちの声を紹介していきます。

「天城学習」で生徒の自尊感情を高める

伊豆市立天城中学校 校長　大塚 明

本校の教育課題の一つとして、生徒の「自尊感情」が低いということが上げられます。しかし、中学校という限られた人間関係だけでは「自尊感情」を高められないことが分かり、さらなる手立てを探っていたときに ESD と出会い、これだ!と直感しました。そこで ESD の「持続可能な社会の担い手づくり」という視点で教育活動全体を見直したいと考えました。

具体的な方法として大きく二つのことに取り組みました。一つは、今までの総合的な学習の時間を ESD の視点で見直し組み替えていくことです。天城に住んでいながらその良さを感じていない生徒に、天城が持つ自然や文化のすばらしさを実感させるためには、地域での体験活動や地域の人とのつながりを重視する必要があります。この、地域での体験重視、地域の人とのつながり重視という 2 点を基本に、持続可能な社会の担い手を育てることを目標に 3 年間の総合的な学習の時間を組み替えました。

もう一つは、各教科・道徳・特別活動と総合的な学習の時間との横断的なつながりの見直しです。世界規模で起きている環境問題が、天城山での様々な環境破壊とつながっていることを理解し、地域を「持続可能な社会」にしていくために自分たちに何ができるか考え、行動できる生徒を育てたいと考えています。

地域とのつながりを重視した天城中学校の「総合的な学習の時間」計画

1 年	2 年	3 年
福祉体験学習 デイサービス、介護老人保健施設、老人福祉施設等での体験を通じ、思いやりの心を育て、よりよい生き方や共生の意味を考える。	**宿泊体験学習** 天城山の縦走を経験することにより身近な自然に変化があることを実感し、環境意識を高め、地域の自然を持続するための方法を考える。	**修学旅行（奈良・京都）** 「2020 年夢天城 ～ 10 年後、天城の魅力を持続・発展しよう～」をテーマに、京都・奈良をモデル都市としてその魅力を探る。
↓	↓	↓
宿泊体験学習 天城山の縦走を経験することにより身近な自然に変化があることを実感し、環境意識を高め、地域の自然を持続するための方法を考える。	**職場体験学習** 地域を支える仕事や産業について考え、地域が現在の経済を維持し、持続可能な発展をするためには何が必要か体験をもとに考える。	**地域学習** これまでの福祉・職場体験も視野に入れ、各自の追究テーマを決定。古都や地域での見聞や検証をもとに、天城の魅力や課題を発見し、今後の地域の持続発展を見据えた提言をする。
↓	↓	↓
総合発表会		

これまでの成果としては、以下の点があげられます。

1. 地域とのさまざまな連携により、生徒にとっても教師にとっても地域とのつながり（絆）が強くなり、それとともに相互の理解も深まったこと
2. 地域の環境破壊などの課題に気づき、生徒たちのなかに何とかしなければという意識が芽生えたこと
3. 天城には、京都や奈良にも負けないくらい誇れるものがあり、そのような地域を愛するたくさんの大人がいることに生徒たちが気づいたこと
4. 教職員が、研修を通じ ESD への理解を深めると同時に、協働意欲が育っていること

一方、今後の課題としては、以下の 3 点があります。

1. 生徒が抱いた課題意識をどのように行動に導いていくか
2. 総合的な学習の時間と各教科のつながりを意識した ESD カレンダーを完成させること
3. 全教師が ESD のファシリテーターとなり、次の教員に引き継いでいくこと

本校の ESD の取組みはまだ始まったばかりですが、ESD を通じた学びや体験を通してこそ、本校の教育課題である「自尊感情」を高め、変化の激しい 21 世紀を生き抜く力、つまり本当の意味での「生きる力」が育っていくと確信しています。

※ユネスコスクールとは

世界 180 カ国で約 8500 校が ASPnet（UNESCO Associated Schools Project Network）に加盟して、活動をしています。日本国内では、2010 年 11 月現在、237 校の幼稚園、小学校・中学校・高等学校及び教員養成系大学がこのネットワークに参加しています。日本では、ASPnet への加盟が承認された学校を、ユネスコスクールと呼んでいます。ユネスコスクールは、そのグローバルなネットワークを活用し、世界中の学校と生徒間・教師間で交流し、情報や体験を分かち合い 、地球規模の諸問題に若者が対処できるような新しい教育内容や手法の開発、発展を目指しています。（ユネスコスクール公式ウェブサイト www.unesco-school.jp より）

外部との連絡に苦慮、体験の大切さを実感

1 年学年主任　久保田正基

一番苦労したのは、外部との連絡調整が予想以上に多かったこと。何をどう進めていったらいいのかわからず段取りが大変でした。天城登山のルートは伊豆市や河津町にまたがっているため、林道にかかっている鍵を借りるために、両方の市町に許可を申請しなければなりませんでした。

雨の中進められた体験学習

私なりのこだわりは、言葉ではなくさまざまな実体験を通して天城の良さに触れることです。当日はあいにくの雨降りでしたが、そのような天候でも、生徒たちは天城自然ガイドクラブの方の話を真剣に聞き、天城の自然を実際に見たり触ったりすることができました。サルナシの実を食べ、「酸っぱい」とか「これがキウイの原種と知って驚いた」などの感想も出て、体験学習の大切さを感じました。

天城の良さを知り、将来天城を離れることになっても郷土を愛する気持ちを生徒たちのなかに育みたいと願っています。夏の ESD 校内研修では、そのような願いを職員みんなで確認できたことが大変良かったと思います。

来年は、今年やった実践をもとに持続可能な地域の未来像を描き、自分なりの考えをもって行動できる生徒を育てていきたいです。

「自分たちはすばらしいところで育っている」と感じさせたい

2 年学年主任　土屋浩之

自尊感情を高めるために、まず力を注いだのが「天城の良さを知る」活動です。昨年までキャンプとして行ってきた宿泊行事を地域環境学習「天城学習」として屋台骨を組み直し、終了後、生徒が「自分たちはすばらしいところで生まれ育っているんだな」という思いを抱く活動にしたいと考えました。同時に、その活動に多くの人たちとの関わりをもたせることにより、より一層広い視野で自分たちの住む地区を見つめ直す機会にすることができると考えました。事前学習では環境カウンセラーに講話を、ハイキングでは伊豆森林管理署や天城自然ガイドクラブの方たちにガイドを、夜のネーチャーゲームでは伊豆自然塾の方たちに、夕食づくりには保護者に協力を依頼するなど、多くの人たちとの触れ合いを意図的に設定しました。

天城自然ガイドクラブの方の説明を聞き入る生徒たち

また、夕食の食材にもこだわり、「天城を食す」をテーマに地元の野菜、豆腐、天城シャモ、猪肉など、周辺の商店や事業所に趣旨を説明し格安で食材を分けてもらい、野菜や米などは協力を呼びかけた家庭から無償提供を受けることができました。当日は 20 人を越えるお母さんたちが朝から炊飯、調理等の準備を行い生徒の到着を待ちました。メニューは、ご飯に天城シャモを焼いたお肉、豚汁、猪カレーというシンプルなものでしたが、生徒たちの顔にもお母さんたちの顔にも笑顔があふれていました。

生徒への働きかけ方を教師も学んだ一年

3 年学年主任　天野正人

昨年からは ESD の考え方が浸透し、本年度にかけ教育活動の軸（視点と指針）となりました。その結果、総合的な学習の時間のテーマを「“2020 年夢天城” ～ 10 年後、天城の魅力を持続・発展しよう～」とし、修学旅行でモデル都市“京都・奈良”の魅力を探りました。

日本画壇の本流「狩野派」発祥の地である「狩野城（伊豆市）」の歴史と当時の人物について説明を受ける生徒たち

また、これまでの福祉・職場体験も視野に入れながら各自の追究テーマを決定しました。古都や地域での見聞や検証をもとに、天城の魅力や課題を新たに発見し、10 年後の天城の発展を願い、魅力ある地域になるための提案を考えました。

学習を進めていくなかで難しかった点は、古都（世界遺産）や地域の魅力・価値を生徒自身が発見できるために、教師がどう働きかければよいかという点でした。職員研修をきっかけに、取材やインタビュー等の重要性を再認識した上で校外学習を実施した結果、既存資料を検索する以上の内容を生徒が意欲的に得たことを確認できました。

今後は、ESD の考えを軸とした教育活動に教師が価値を感じ、継続することが最重要だと思います。

※表紙写真：ガイドの説明を聞く

11 心も育てる学校給食

全国学校給食協会　関 はる子（団体正会員）

学校給食には、基準にのっとった栄養量を満たし安全でおいしい食事を提供するだけではなく、心を豊かに成長させる働きもあります。私がこのことを実感したのは、校舎改築のため 1 年近く給食がつくれなくなり、お弁当持参になったときのことです。昼食時に教室を回りながら、あるクラスに行ったときのこと……。他の子たちにはやし立てられながら、パンの入った袋に口をつけて恥ずかしそうにうつむいて食べている子どもがいました。その姿を見たとき、私は、学校給食の意義を痛切に感じました。「子どもたちにとって食事の時間がつらく悲しいものであってはならない」。「学校給食は、食べることを通していろいろな命をいただいていることや、食べものがつくられるまでに多くの人の手がかかっていることへの感謝の気持ちを育てる場にならなければいけない」。また、ルールを守り協力し合う意識を持つようになり、友だちが気持ち良く食事ができるよう相手を思いやる心が育つ場にしなければと思いました。

それから 30 数年がたち、学校給食は今や食教育のなかの大きな要です。子どもたちだけではなく、多くの人びとが食の大切さを知り、合わせてお互いを思いやる心を育てる場であってほしいと思います。

12 西淀川高校ESD＝公害×環境×人権×地域

西淀川高校　辻 幸二郎（個人正会員）

本校は大阪市の北西部、阪神工業地帯の一角にあり、大小の工場群に加え多くの幹線道路が通るため、4 大公害地域と並ぶ公害病の救済指定地域にされた歴史があります。喘息を経験した生徒も多く、西淀川高校では「公害教育こそが ESD につながる」と考えています。

本校生徒の多くは多様な背景と困難を抱えています。生徒たちには成功体験の乏しさ、学校や社会、自分に対する否定感、無力感、疎外感などが共通します。われわれ教師も一緒になって農作業で汗を流す一方、公害裁判を闘ってきた「普通のおっちゃん・おばちゃんの生き様」を教えることで、「社会を変えるのは何もエライ人だけではない、自分がどう考えて行動するか」ということを伝えています。

また菜の花プロジェクトを展開し、地域の NPO「あおぞら財団」や小・中学生・大学生などと連携して様々な取組みをしています。クラブ活動も結成され、地域の方たちに見守られながら異年齢の子どもたちがお互いに教え合うことで、一歩成長する姿が見られるようになりました。卒業生の多くは近隣の町工場などに就職しますが、市井の中で ESD 的なセンスを持ったキラリと光る大人に育ってくれることを期待しています。

私たちが ESD-J に入ったわけ

青年海外協力隊の経験を「学び」に

社団法人 青年海外協力協会（JOCA）（団体正会員 2010 年 6 月入会）

私たちは、青年海外協力隊の経験を役立てられるようなプログラムを実施しています。そこでは、途上国の現状や、協力隊員がそこで感じたこと考えたことなどを、疑似体験を通して学び、地球に生きる一人の人間としての自分を見つめなおすきっかけを提供しています。

現在、学校教育において地域ぐるみの教育活動のあり方が模索されています。生きる力や社会を観る力を育む学習とは何かを考えながら、私たちはプログラムづくりを積極的に行っています。

ESD-J の皆さんと一緒に、経験や実践の場を共有しながら、ESD 推進を応援していきたいです！

高校での出前授業のようす。さまざまな依頼に応えられるよう、講師育成も実施しています↑

地域ぐるみで「次世代の市民」を育てる

～「ユネスコパートナーシップ事業」の取組みから～

この事業は文部科学省の委託を受け、直接的にはユネスコスクール参加校を広げるためのものですが、この事業をとおして地域と学校が一体となり、持続可能なコミュニティ、地域、世界を担う「次世代の市民」を育てるしくみをつくり出すことに主旨があります。

取組みは大きく二つに分かれます。

1. 多摩市教育委員会 ESD 教員研修会の開催

― 既存の取組みを ESD の視点で組み立て直す ―

ESD-J と多摩市教育委員会では、「2050 年の大人づくり」を具体化するために、2009 年度から小中学校の教員を対象とし、地域の市民団体なども一緒に「ESD 研修会」に取り組んできました。2009 年度は、① ESD の視点や方法を身につける、②小・中学校それぞれで一つ既存の授業を取り上げて ESD の視点で組み立て直す、ということに取り組みました。

小学校：「なぜ食べ物を大切にしなければいけないか」
　→食農教育の ESD 化
中学校：「つながりを考える職場体験」
　→自然やモノとのつながり、人とのつながり、世界とのつながり

2009 年度の研修の参加者から「実践を通じた検討が必要」との声があがり、2010 年度は、研修の参加者が実際に ESD を視野に入れた授業をやってみて、みんなで評価・手直ししていくやり方をとっています。

中学校では「自然とのつながり、人とのつながり、世界とのつながりという三つの視点で職場体験のインタビューをしよう」という授業が行われました。その質問づくりの授業を参観したあとの協議会では、市全体として事業所に働きかけ、地域とともに進めていくことで、生徒も大人も学ぶ機会になることの大切さが話し合われました。小学校でも「誰にもやさしいまち」をテーマに、2011 年 2 月に研究授業を実施する予定です。すでに多摩市では 10 校がユネスコスクールに登録され、さらに 6 校が申請中ということです。3 年目となる来年度は、他の小中学校にも広がっていこうとしています。

→板橋区の成増小学校で行った ESD セミナーでは、コーディネーターのほか、地域の保護者も多数出席

2. 地域コーディネーターユネスコスクールセミナーの開催

― 子どもが自発的に探究し、地域の力で深める ―

東京都にはすでに 560 人の地域コーディネーターが、学校と地域をつなぐ役割を担っています（地域コーディネーターについては、7 ページ参照）。2010 年度は、地域教育推進ネットワーク東京都協議会と連携し、文京区と板橋区と小平市の 3 地域のコーディネーターとともに、地域にある人と資源をいかしてどのように ESD に取り組んでいくかを話しあい、ユネスコスクールセミナーを開催しています。

セミナーには、近隣地域の地域コーディネーターや教育委員会の学校支援本部担当者、その地域の保護者などが集まり、学校と地域がどのように協力すれば地域の子どもを育てていくことができるかを話し合っています。

文京区では、「これまで子どもたちをお客さんにしてしまっていたのではないか」との反省の声があがり、もっと子ども中心の学びを支援しようという話になりました。また板橋区では、荒川や赤塚公園をはじめとする板橋ならではの自然や農地、歴史、光学をはじめとする工場といった地域資源を活用し、元気な高齢者や近隣といった人的なパワーを発揮すればきっとおもしろいことができるというワクワク感が共有されました。2011 年の 2 月にセミナーを実施する予定の小平市では、市にいる数十名のコーディネーターを中心に、これまでの成果と課題について ESD の視点で見直し、今後の取組みの方向性を見出していこうとしています。

このように、今、東京では、地域コーディネーターが核となり、PTA の保護者たちや自治会の人たちもまじえて、地域発の取組みが始まろうとしています。

（地域 PT リーダー /NPO 法人エコ・コミュニケーションセンター　森 良）

↑多摩市 ESD 研修会では、小学校、中学校に分かれて、各校で実践できる ESD を検討
→エコプロダクツ展にて、多摩市教育委員会が NPO と連携した ESD の推進の重要性をアピール

つなぐ人の視線 ＜第10回＞

小平市立第二中学校　地域コーディネーター　布 昭子さん
文京区立駒本小学校　地域コーディネーター　水木 優香さん
板橋区立成増小学校　地域コーディネーター　白鳥 円啓さん

今回は、ユネスコパートナーシップ事業（5ページ参照）のパートナーになっていただいている3名の地域コーディネーターの方たちに、学校と地域をどのようにつなぎ、ESDにどのように関わっていこうとされているのかをうかがいました。

地域と学校のつなぎ手の思いが地域を変える

現在、学校とどのような取組みをしていますか？

水木さん：

「日本や世界を導くことのできる大人に育てたい!」「学校を核とした地域の活性化を図りたい!」という理念のもと、授業支援や学習環境の整備、学校行事やPTA行事支援をコーディネートしています。机上の学習だけでなく本物と触れ合う機会を増やすことに力を注いでいます。なかでも、地元商店街や障害者支援団体などに協力いただきながら、キャリア教育と福祉教育を6年間の一貫した計画のなかで実施していることは特徴的だと思います。

布さん：

子どもたちにとって学校生活が「勉強がわかる」「友だちがいる」「役割がある」、そういう場となるための支援をして9年になります。学校現場のニーズを見極め、企業・大学・NPO・団体・行政などの地域の力と保護者の想いと学校とをつないでいます。具体的には、数学や英語、総合的な学習の時間などの授業支援、放課後支援のほかに、学校行事や教員研修など、さまざまな相談にのっています。

白鳥さん：

ESDに関する活動でいえば、ユネスコスクールセミナーを実施するなど、学校長とともに、教職員や地域の方たちに「ESDを知ってもらい学校内でESDに取り組んでいる様子を想像してもらう」活動を進めています。また、総合的な学習の時間のコーディネートをする際には、プログラムにESD的視点が少しだけでも加えられるような努力をしています。コツコツ、少しずつの普及活動ですね。

ESD的な活動をすすめる上で大切にしたいことは？

↑布昭子さん

布さん：

まずは笑顔、明るい挨拶、そして健康（笑）。それから、相手を尊重し対話を惜しまないこと、私自身が学びつづける意欲を持つこと、相互の目的と役割を明確にすること、信用と信頼を積み重ねること。最後に、仲間や支えてくれる人の心と想いを感じながら、勇気を持って挑戦することですね。

水木さん：

学校教育目標や学級運営方針に沿った活動であることが大前提になります。そのなかで、学校・子どもたち・地域の3者が「やらされている感」を抱くことなく、互いに育て合い、育ち合うような関係づくりが求められていると思います。

↑水木優香さん

白鳥さん：

学校経営計画を理解し、その点を考慮したアプローチが重要だと思います。学校は教科学習を中心に考えています。そこにESD的視点やESD的活動を入れるには、学校経営計画との融合が必要です。そのためにも、学校長をはじめ教職員との密なコミュニケーションは欠かせません

活動を通して、うれしかったこと、感動したことは？

水木さん：

子どもたちの瞳が輝く瞬間に立ち会えることが何よりもうれしいです。本物に触れ合えたときの感動や他者に認められた喜びは、大人でも子どもでもしっかりと見開かれた瞳に輝きとなって現れます。この素敵な表情に出会いたい気持ちが、コーディネーターとしての活動の原動力となっています。

布さん：

「勉強がわかった」「うまくできたよ」という子どもたちのはずむ声と輝く笑顔。先生方が「こんなに楽しく感じた取組みはない」「私たちもがんばります」と言って見せてくださるやる気と安堵の笑顔。地域や保護者の方たちが「一緒にできることがあれば相談に乗ります」「この地域に引っ越してきてよかった」と支えてくださる暖かい笑顔。笑顔は苦労を吹き飛ばし、やる気とイメージを沸かせてくれる魔法の力。子どもたちと一緒に未来を創ろうと汗し、知恵と手を貸して下さる大人がたくさんいることに感謝ですし、希望を感じます。

白鳥さん：

ESDについて地域や保護者の方たちに理解され、「白鳥さんの地域支援のイメージが分かった気がする」と言われたときですね。ESDを通して、学校支援のイメージが共有できる喜びは格別です。

ESDへの期待、これからしたいことは？

白鳥さん：

ESD的視点や活動が地域支援には必要であると考えて、コーディネーターの活動をしています。だからこそ、知名度を上げることが必要です。ESDを理解していない方は、何だか面倒なものが新しく始まるのではと感じるようです。そうではなく、ESDが今までの活動に新しい視点を加えるところから始まることを知ってもらえれば、より多くの学校現場で実施できると確信しています。

↑白鳥円啓さん

布さん：

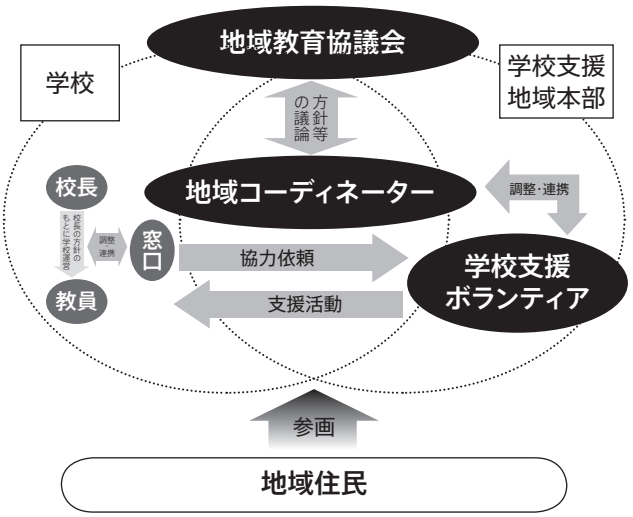
ESDは、日々の実践のなかでできていることをつむぎ直すことでどのような分野でも活用できます。プロセスを重視して生き方や行動を考えるESDの視点は次世代育成に欠かせません。まずは子どもたちの夢と未来に関心を持ち、一緒に行動してくださる方たちに、具体的な実例を通して、対話を重ね、理解を広げていきたいです。

水木さん：

学校が地域や保護者に協力をお願いするという一方通行の関係から一歩踏み出し、学校と地域が共通の教育目標や教育理念を持つ対等な関係の必要性を強く感じています。そしてESDが、子どもを中心に人のつながりを再構築し、地域活性化の起爆剤となることが十分可能であると確信し活動を続けています。今後も地域全体でESDを学ぶ機会を提供し、地域に合った活動を仲間と探りながら推進していきたいです。

（取材：ESD-J 佐々木雅一）

学校支援地域本部のしくみ



数字で見る“社会” 第6回

6,795人

学校支援地域本部で登録されている全国の地域コーディネーター数

（2010年5月現在・文部科学省調べ）

“地域と学校をつなぐ”―ESDの周辺でも常々話題になるこのテーマ。文部科学省は、地域住民が積極的に学校運営に参加できるよう、2008年度から3カ年計画で、学校支援地域本部の設置を推進しています。その核となるのが地域コーディネーターです。

1,001の市町村で、2,528の本部、小中学校あわせて8,507校が関わる取組みになっていて、学校単位、小中学校合同、自治体に一つなど、様々な形で、この学校支援地域本部が設置されています。コーディネーターは、1本部あたり平均2.7人、全国では6,795人が登録されています。2011年度以降も、国、県、市町村が1/3ずつ負担する補助事業として継続する予定です。

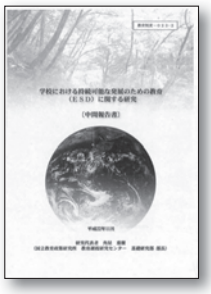
また、この施策に関連して、2011年度からは「『新しい公共』型学校モデル事業」が実施される予定です。上記の学校支援地域本部やコミュニティ・スクール制度、放課後子ども教室推進事業など、地域と連携した学校づくりのモデルを構築するための枠組みで、現在10数カ所での実施を目標に検討が進められています。今まで学校支援地域本部の主眼が「学校側を支援する」ことに置かれていましたが、この事業では「地域と学校の共助による学校運営」を通じて、学校と地域がともに活性化する好循環を生み出すようなモデルの構築を目指しています。

ESD-Jでも、社会教育の最前線で活躍するみなさんとともに、学びのコーディネーターのあり方検討や支援、養成に関する活動を行っています。上記のような事業を通して地域や学校にモデルが浸透することで、地域の未来をつくるESD的視点を持つ人たちの活躍の機会が増えることを期待したいと思います。今後、これらの学校教育施策と相乗効果を生み出せるような活動や提言を積極的に行っていきたいと考えています。

取材協力：文部科学省生涯学習局
社会教育課地域学校支援推進室
工藤松太郎さん

（ESD-J 理事　吉澤卓）

トピックス 学校におけるESDに関する研究の中間報告書が発行されました



国立教育政策研究所のプロジェクト研究である「学校における持続可能な発展のための教育 (ESD) に関する研究」の中間報告書が発行されました。

この研究は、学校において ESD を導入・実施するための基本的な考え方や具体的な授業の開発を主なねらいとしています。このねらいを実現するため、次の 2 点を課題として設定し、研究活動が進められてきました。

① 学校や地域における ESD の取組状況について、諸外国も含めその動向を調査すること
② ESD の枠組みを提案し、その有効性について授業実践を通じて検証すること

今年度は、ESD に関連する資料を収集整理すると同時に、ESD のねらいを実現するための仮説を提案し、授業の設計および実施を通じて検証が行われました。具体的には、「視点整理型アプローチ」、「チェックシート型アプローチ」という二つの仮説が提案され、それぞれの方法に基づいて、計 16 の授業の実践と検証が行われました。特に視点整理型アプローチを行うに当たり、文部科学省の「生きる力」とユネスコ国内委員会や ESD-J など各機関が提唱している「ESD を通じて育みたい能力や態度」を整理し、学校における ESD を俯瞰的に提示しようとする試みは参考になります。

また、イギリスおよびドイツにおける ESD に関する取組みも紹介され、「ESD スクールのための質基準」に関する資料の邦訳が参考として提示されています。

表 2 「生きる力」と ESD で重視する能力・態度との関係

「生きる力」		ユネスコ国内委員会 (2008)	ESD-J (2006)	ツールキット (2002)	資源レビューツール (2005)	視点整理型アプローチで取り上げた能力・態度
確かな学力	思考力判断力	代替案の思考力（批判力）	自分で感じ、考える力 問題の本質を見抜く力	批判的に考える力	批判的思考	→①
	表現力	コミュニケーション能力	気持ちや考えを表現する力	コミュニケーション能力		→④
	課題発見能力 問題解決能力	体系的な思考力		システムをとらえる力 多様な探究過程を駆使する力	システム思考	→③
			望む社会を思い描く力	将来を予測・計画する力	未来思考	→②
			具体的な解決方法を生み出す力		問題に対処するスキル	
		情報収集・分析能力				
			環境容量を理解する力			
豊かな人間性	自律心		自ら実践する力	行動に移せる力	行動スキル	→⑦
	協調性		協力して進める	他者と協力して行動する力		→⑤
	感動する心			感覚的な反応を発達させる力		
ESD 独自		持続可能な発展に関する価値観を見いだす力	多様な価値観を尊重する力	量・質・価値を区別する力		→⑥

（注）表中の能力・態度等の表記の一部は、原文を簡略化して示している。

表3の①～⑦に対応

来年度は、ESD を教育活動に具体化するための枠組みについてさらに検討を深めるとともに、取り扱う教科等の幅を広げ、ESD に基づく授業の開発を進めることが予定されています。

この報告書は以下の国立教育政策研究所のサイトでダウンロードすることが可能です。

URL : http://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/esd_chuukan.pdf （PDF 8.5MB）

（ESD-J 佐々木雅一）

←「生きる力」と ESD で重視する能力・態度の関係（本報告書 12 ページ掲載から）

新メンバー紹介 9～12月

8 名の方が新たにメンバーに加わりました

個人会員 （関東 5 名、北陸 1 名、四国 2 名）

編集後記

はじめまして。ボランティアの中村と申します。今号の ESD レポートには編集に直接かかわれませんでしたが、編集会議に出席させていただきました。ESD レポートは 8 ページの冊子ですが、編集会議がこれほど熱いとは思いませんでした。多数の案がでてきて、それをどうやって 8 ページにまとめあげるのか、かなり濃い議論が交わされていました。編集会議の熱さが ESD レポートを通して少しでも会員のみなさんに伝わればいいなと思います。（ESD-J ボランティア　中村昌義）

ESD-J だより

10月～12月の活動

10月11-29日	生物多様性交流フェア 出展
10月13日	「ESDの10年世界の祭典」理事会 出席
10月16-17日	環境省コーディネーター育成モデル研修① 開催
10月19日	国際フォーラム「ESD Meets CEPA」開催
10月21日	SR円卓会議総合戦略部会 傍聴
10月27日	経団連社会貢献基礎講座 講師
10月27日	環境省NGO連携フォーラム企画委員会第1回 開催
10月29日	パナソニックR&Dユニオン研修 講師
10月30-31日	ユネスコスクール全国大会 出席
11月4日	＋ESDプロジェクトロゴマーク選考委員会　開催
11月5日	文科省ユネスコプロジェクト第3回多摩市ESD研修 開催
11月6-7日	ESD 東北フォーラム 2010 in あきた 出席
11月15日	CBD市民ネット･COP10サイドイベント報告 出席
11月19日	CBD市民ネット開発作業部会 出席
11月27日	地球環境基金助成事業報告会 出席
11月30日	ESDレポート編集会議 開催
12月3日	SR円卓会議･協働モデル事業実行委員会 出席
12月6日	ユネスコスクールにおけるESD普及促進活動事業委員会 出席
12月8日	多摩連光寺小学校研究授業 出席
12月9日	文科省ユネスコプロジェクト板橋区ESDセミナー 開催
12月11-12日	ESD的アプローチ実践講座 開催
12月11日	EPO中国 ESD フォーラム 出席
12月12日	ESDアジアNGOネットワークフォーラム 開催
12月13日	第12回ESDカフェ 開催
12月14日	環境省コーディネーター育成検討委員会 開催
12月16日	環境省NGO連携検討会合第2回 開催
12月17日	環境省NGO連携フォーラム企画委員会第2回 開催
12月17日	SR円卓会議人づくりワーキンググループ 出席
12月18日	ボランティア･コーディネーター研修会 協力開催
12月18日	玉川大学ESDセミナー 出席
12月23日	ESD×生物多様性プロジェクト企画会議 開催
12月23日	第3回理事会 開催

認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議（ESD-J）

http : //www.esd-j.org/　　e-mail : admin@esd-j.org

〒150-0001　東京都渋谷区神宮前5-53-67　コスモス青山B2F

TEL : 03-3797-7227　FAX : 03-6277-7554

● 会員募集中 : 正会員（10,000 円）、準会員（3,000 円）詳しくは HP をご覧ください ●

発行:認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議　編集:ESD-J情報共有プロジェクトチーム　レイアウト:河村久美

ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC™ C004858

この印刷物は、適切に管理された森林の認証木材から作られた紙と、フードマイレージに配慮し、米ぬか油を使用したライスインキで印刷しています。